talk! talk! talk! 映画カメラマン・早坂伸さん

映画カメラマン

早坂伸さん

映画カメラマンとしていくつもの作品に携わり、芝居を魅せる映像を撮影してきた早坂さん。映画『あたしとあたし』の撮影を担当し、その後もD90を使って新たな映画撮影をしている。また写真を趣味とし、腕前もプロ級。映画人の彼が語る映画撮影と写真撮影の特徴やそれぞれの楽しみ方、またゴットファーザーの話から新作映画の話にいたるまで、バラエティに富んだトークをお楽しみください。

プロフィール

早坂 伸（はやさか しん）。1973年11月29日生まれ。宮城県出身。
千葉商科大学商経学部卒。日本映画学校映像科卒。中日新聞東京本社編集局にて契約社員として5年間勤務。98年からフリーの撮影部。
阪本善尚氏、萩原憲治氏、佐藤和人氏、佐々木原保志氏、上田義彦氏らに師事。日本映画撮影監督協会（J.S.C.）所属。
作品として、『青〜chong〜』（99年、李相日監督、PFFグランプリ他を受賞）、『青の瞬間（とき）』（01年、草野陽花監督）、『東京大学物語』（05年、江川達也監督）、『リアル鬼ごっこ』（07年、柴田一成監督）『呪怨 黒い少女』（09年、安里麻里監督）などがある。

Beginning 出会い

きっかけは巨匠たちとの出会い！

まず映画『あたしとあたし』の撮影で、始めてD90を使った感想を聞かせていただけますか？

一番衝撃的だったのは、被写界深度ですね。ビデオカメラとはかなり差があります。ビデオカメラは被写界深度が深い、フラットな映像が性格といえるんですが、D90は被写界深度の浅い、ボケのきれいな映像が撮れる。わかりやすく言えばフィルムのムービーカメラの映像に近くて、高級感のある映像なんです。それにはとてもわくわくしました。

草野監督もやはり、被写界深度のことをおっしゃっていました。

最近の映画はビデオカメラで撮影することが多いので、フィルムのムービーカメラのような映像が撮れることにはやはり驚きなんですよ。ビデオカメラで被写界深度の浅い映像を撮る場合には、レンズにフィルターのような機材をつけなくてはいけなくて、予算もかかりますし、強引に背景をぼかしている画が、僕はあまり好きではないんです。だから余計にD90の映像には魅力を感じます。

『あたしとあたし』ではそういった特徴が活かされていましたね。

はい。それに僕は写真も好きで撮るんですが、自分の持っているレンズを使って映画を撮れることが面白かったですね。普段使い慣れている愛着のあるレンズで映画を撮るということは、思い入れも強くなりますし、精神的に楽しかったんですよ。

写真への興味は、映画を撮るようになったことでわいたのですか？

そうですね。ムービーカメラマンの助手時代から、仕事現場でスチールカメラマンの方々と接する機会がたくさんあったんです。上田義彦さんや藤井保さんといった写真界の巨匠と呼ばれる方々の仕事風景を見ているうちに、写真に興味がわきました。

なるほど、フォトグラファーの方々ともお仕事されていたのですね。

はい、フォトグラファーと接する機会は多かったんです。上田義彦さんは広告の写真を撮るだけでなく、CMの監督もされるんですね。だいたいCM撮影の現場には、ムービー部隊とスチール部隊がいて、スチール部隊のメンバーは上田さんの事務所のスタッフの方々で、ムービーの方は我々フリーの人間が担当していました。ある程度チームは固定されるので、僕は2年弱くらい上田さんと仕事をしていたんです。そういう職場環境もあって、写真は身近な存在でした。

第一線の方々とお仕事をする機会があるのは、とても刺激が多そうですね！　印象に残ったことなど教えていただけますか？

正直何が面白かったかというと、フォトグラファーの方の人間性なんです。ずっと映画畑だった僕の目に、スチールの方の考え方が新鮮に映って、惹き込まれましたね。たとえば、映画のカメラマンは格好をつけたがる雰囲気があるんですが（笑）、上田さんしかりフォトグラファーは子供みたいに無邪気で、自分の撮ったものを自分から「これいいでしょ！いいでしょ！」と言ってきたりするんです。そのギャップにまずびっくりしましたね。そんな人柄を見ているうちに、写真も見よう見まねで始めたという感じです。露出など技術に関してはムービーカメラと通じるところがあるので、苦もなく操作できましたし、中判カメラや大判カメラでも撮影するようになりました。

Pleasure 楽しみ

息抜き的存在であり、自分の感覚を磨くもの

本格的に写真を撮られているのですね。

確かにカメラやレンズはいろいろそろえていますが、僕にとって写真はあくまでも息抜き的な感じなんです。映画の仕事というのは、集団で制作するもの。大勢の人とともにひとつの作品を作る毎日です。そんな中でときどき、何にも縛られずに自己表現したいという気持ちがわいてきます。その自己表現のフィールドが、僕にとっては写真でした。

集団で作るものと個人で作るもの、表現方法としてはプロセスや制作中の感覚など、異なる部分が多いのでしょうね。

映画でできないことを、僕はスチールで楽しんでいるところがありますね。気晴らしに近いというか（笑）。写真撮影や現像でできるいろいろな工夫が、映画の撮影でも可能になればいいのにとはよく思います。映画はスケジュールがきっちり決まっていて、仕事がないときは表現する場所自体がなくなってしまいますしね。なおかつ映画は制約が多いんです。

具体的に映画撮影ではどういったことが制約になるのですか？

映画の場合はシャッタースピードが決まっていて、長時間露光ができないですし、現像に関してもいろいろ工夫してやることはできないんです。僕はクロスプロセスが好きなんですが、映像でやろうと思うと簡単にはできません。だからその分写真で楽しんでいますね。

普段はどんなものを撮られているのですか？

スナップが多いです。一人でふらりと歩いて、撮る場合がほとんどです。でも撮影は気が向いたときだけです。忙しいとまったく撮れませんし、正直ここ2、3ヶ月はカメラ触ってないですね（笑）。

今日お持ちいただいたプライベート写真（Photo's1〜6）はすべてフィルムだそうですが、フィルムにはこだわりがあるのですか？

ありますね。FE、FM3A、F3、FA、ニコンのカメラは4台所有していますが全部フィルムです。D90もすごくきれいに撮れますし、デジタルカメラもいいんですけど、でも同じ被写体に対して何枚か撮ってしまいがちですよね。その中からベスト選ぶために。フィルムの場合はデジタルのようにたくさん撮影できませんから、おのずと一発勝負になります。“その瞬間”に集中することが好きなんです。あとは、補正を加えずに、撮影時の設定ひとつで作品を作るという点も。

自分の露出、自分の色、被写体と出会ったときに感じたそのままを一度のチャンスで写し出すということですか？

はい。デジタルカメラだと補正することが前提になってきます。もちろん、それはそれでいいのですが、一発で狙いを決めて、補正しなくても思い通りに撮れる、その勘を鈍らせないためにもフィルムで撮り続けたいと思うんです。映画を撮る際も、自分の表現したいと思うトーンや色調を補正して出すのではなく、撮影したそのままで出るようにしたいと思っているので、そのためにも写真で感覚を磨いているんです。露出の差が明確に出るポジで撮ったり、わざとラチチュードの狭い条件で撮ったり、クロスプロセスで現像したり。あえて難しい状況に挑戦しています。成功することもあれば、失敗もしますけどね（笑）。

撮影時のポイントを教えていただけますか？

やはり光は意識します。あとは、良いと思った瞬間にシャッターを切るということ。本当に良いと心で思ったものを撮影しないと、やはり良い写真は撮れません。それは映画も同じで、良くないなと思ったものは当然良くない。でも、そういう状況でも映画を撮らなくてはいけなくて、陽が落ちた後に昼間のシーン撮ったり、雨の中晴れのシーンを撮ったり。仕事の現場では悪条件の中撮影をしなくてはいけません。だからこそ、写真を撮るときは自分が本当に良い！　と思ったときにしか撮らないようにしています。

心が動かされた瞬間というのを大切にしていらっしゃるのですね。でも映画の撮影では、そうじゃない場合も？

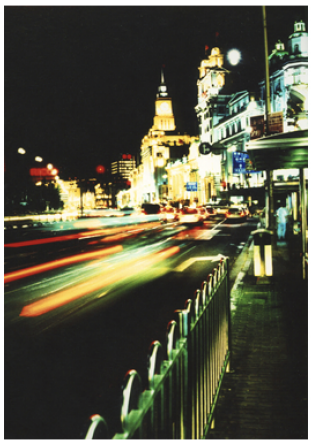
ありますね。映画では僕が良いと思えない映像も、そのまま流れてしまいます。カメラマンの心情的にはきついんですよ。だから、シーンごとに外して欲しいと思うこともあります。でもそれではストーリーがおかしくなりますからね（笑）。

見てる側はそういった観点がないので、驚きです。

どんな巨匠のカメラマンでもそういう思いをすることはあるんですよ。たとえば『ゴッドファーザー』の冒頭にアル・パチーノとダイアン・キートンが木陰で話しているシーンがあるんですけど、撮影時には陽が暮れてしまっていたそうなんです。撮影監督のゴードン・ウィリスは、そのシーンに関してすごく怒りながら撮影していたらしいです。確かに言われてみるとナイター撮影だって思うんですけど、普通見てる分には全然ひっかからない。それだけ巧いと言えるんでしょうけど。

Photo's 作品紹介

ストーリーの潜む写真と　映画『結び目』より



映画「結び目」より　絢子役：赤澤ムック　©2009アムモ

映画「結び目」より　啓介役：川本淳市　絢子役：赤澤ムック　©2009アムモ

映画「結び目」より　啓介役：川本淳市　絢子役：赤澤ムック　©2009アムモ

映画「結び目」D90での撮影風景　撮影：辺見亮子

Future これから

個展の目標とD90での新たな挑戦！

映画と写真の両者の撮影において、カメラをのぞく感覚は違いますか？

それは全然違いますね。単純にシャッタースピードの差、瞬間と継続した時間の差で感覚は変わりますし、仕事と趣味という精神的な違いも大きいです。先ほどもお話ししました映画撮影の制約にプラスして、基本的に僕は画的なカメラマンではなくて、芝居的なカメラマン。映像において自分の撮りたい画を重視するのではなく、いかに演出の邪魔にならずに演者の芝居を撮れるかということに重きをおいています。そういった反動もあって、写真のときは自分の撮りたい画だけを撮っています。

写真では自分の視線を大事にし、映画では観客の視線を大事にする撮影を心がけているのですね。

そうです。「あの映画は画が良いね」という言われ方は僕は好きではなくて、「あの映画が良いね」といわれるのが一番の褒め言葉だと思うんです。画だけがすごく良くても意味がない。あくまでもストーリーとの融合だと思っているので、映画カメラマンは黒子スタイルが正当と僕は思うんです。画が良くなくても、芝居や物語が良ければ見ている側は気にならない。あのシーンだめだったなと言っているのはカメラマンだけですからね（笑）。仕事は自分の思うようにいかないことも多々あるわけで、その点写真は一番の自己表現ができる存在です。

これから撮りたい被写体や、写真で挑戦したいことなどはありますか？

夜の風景が好きなので、夜を自分の色彩感覚でどんどん撮っていきたいと思います。映画を生業としているからかわからないんですけど、写真にもストーリーを見出したくなるんです。もしかしたら、ストーリー性を夜の闇や暗いトーンに求めているのかもしれません。僕の中で映画と写真は補完関係といえます。将来的にはこれまで撮ってきた写真をまとめて個展もしたいですね。

では、来春公開予定という映画『結び目』（D90で早坂さんが撮影）についてお聞きしたいのですが、早坂さんが『あたしとあたし』に続き、D90で撮ろうと思った理由を教えてください。

ビデオカメラでも成立はするとは思ったんですが、D90だったらプラスαが望めるのではないかと考えたんです。それに、劇場公開作品をD90で撮ったということは国内で初だと思うので、そういった意味合いも含めて話題になればと思いました。『あたしとあたし』は映像をきれいに撮ることを中心にした映画でしたが、今回は映像ではなくて物語を見て欲しい作品です。

簡単にストーリーをお教えいただけますか？

現実生活でそれぞれ問題を抱える2組の夫婦を中心に、愛や社会との繋がりを見つめていくという話です。教師と生徒という立場で関係を持った過去のある男女が、それぞれに家庭を持ちながらも、再び出会い、また関わりを持っていく。官能的でもあり文学的な雰囲気もある映画です。ローバジェット（小規模予算）ですが、仕上がりに関しては低予算にはまるで見えない。それはD90の力でもあるし、役者さんの力、監督の力が相成っていて、最近僕が撮った作品の中では一番手応えを感じる作品です。

すごく楽しみな映画です。D90で撮影したことのプラスαは結果的にありましたか？

それは十分にあったと思います。芝居と映像の質感がうまくマッチしましたし、低予算での撮影を可能にしたということも大きいです。この規模で良質な作品が撮れれば、日本の映画も底上げになると思うんです。監督が本当に撮りたいものを撮れる機会が増えるということですから。一眼レフカメラで動画が撮れるという新しいメディアには、日本映画のそういった未来を担う一端としての働きを期待しています。

本日はありがとうございました。『結び目』も期待しております！

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.